

1990年の創業以来、宮城県で人にも地球環境にも優しい高性能な家づくりに取り組んできたヒノケン。住まい手の想いに寄り添った、質の高い設計力にも定評があります。そんな同社が2024年1月に立ち上げたのが、リノベーション部門の「ヒノリノ」です。立ち上げの経緯やこれまでの実績、リノベーションの設計で大切にしていることなどについて、取締役専務の佐藤幸徳さんにお聞きました。

暮らしを紡ぐ、 ヒノケンの リノベーション

hinoreno

設計士が2人一組で、最初から最後までお客様のリノベーションをサポートする「ヒノリノ」

——「ヒノリノ」はどのような経緯で誕生したのでしょうか？

直接の契機となったのは、同時期に2組のお客様から「実家をリノベーションしたい」というご相談があったことです。土地や建築資材などの価格高騰により、新築のハードルが上がっており、リノベーションに目を向ける方が増えてきていることを実感しました。

また、ヒノケンも創業から30年以上が経ち、創業初期に弊社で建てられたOB様がリノベーションを考える時期にも入っています。今後ニーズが高まるリノベーションのご依頼に着実に応えられる体制を整えようと「ヒノリノ」を立ち上げました。

——これまでの実績について教えてください。

2024年は9棟完工し、2025年も8軒のご依頼を承っています。いずれも設備交換などの簡単なリフォームではなく、フルリノベーションです。持ち家のリノベーションが7、8割、中古住宅を購入してのリノベーションが2、3割というところでしょうか。

——ヒノケンとして、「ヒノリノ」の存在意義をどのように捉えていますか？

私たちは、100年住宅をうたい、お客様が先々までずっと快適に

暮らせる耐久性に優れた住まいを、手間ひま惜しまず建てることをモットーとしています。その「ヒノケンイズム」をリノベーションで実現するのが「ヒノリノ」です。

戦後の日本の住まいは、30、40年で建て替えるのが一般的でした。でも現代は違います。環境負荷を極力抑える本格的なストック型・循環型社会への転換が必要で、住宅に関しても今ある建物に手をかけて大切に住み継ぐ方向にシフトしつつあります。断熱・耐震改修を含む「性能向上リノベーション」で、100年暮らせる住宅を叶えることがヒノリノの存在意義だと考えています。

——「ヒノリノ」の強みは何ですか？

それは「設計デザイン力」です。弊社は全社員13名という少数精鋭ですが、そのうち設計が6名で二級建築士が3名、二級建築士が2名という層の厚さが自慢です。

また、営業マンはおらず、設計士がお客様の要望を直接うかがってプランに落とし込んでいます。1軒につき設計士2名でチームを組み、話し合いながら進めることで考え方のバリエーションが取れたプランをご提示できるのも特徴です。設計士が、予算やスケジュールの管理、施工担当者との調整まで、施工以外の仕事を一手に担う「お客様のトータルパートナー的存在」である点が、ヒノリノの一番の強みといえます。

——設計をするうえで大切にしていることをお聞かせください。

私たちは東日本大震災以降、本社のある石巻市を拠点に多くの新築を手がけ、リフォームにも対応してきました。その経験は確実に技術の向上につながっています。しかしそれ以上に大きかったのは、「お客様の想いに寄り添う」というヒノケンの信念が確立されたことです。

「もとの家とまったく同じ家を建てたい」と願う津波で家が流失したお客様がいたら、「がれきの中から見つけ出したものを使してほしい」と要望されるお客様もいました。そうした経験から、実家リノベーションでは特に「もとの家の思い出を残す」ことを大切にしています。たとえスケルトンリノベーションでも、柱や梁な

ど何か一つでも痕跡を残すことで、親から子や孫へと、ご家族のストーリーや想いを受け継いでいただければと考えています。

——「ヒノリノ」でリノベーションしたお客様からはどんな反応がありますか？

お客様からは「ここまでできるとは思わなかった」「新築みたい」という声をよく聞きます。リノベーションは新築よりも制約はありますが、性能デザインともに意外と自由度が高いです。何かと費用がかさむ今、限られたご予算の中で長く快適に暮らせる住まいを手に入れる方法として、「リノベーション」は有効な選択肢の一つではないでしょうか。



後列左から鹿又弘枝さん、佐藤幸徳さん、加藤絵里華さん
前列左から吉本美紅さん、佐藤望有さん、畑山寿和さん